

我孫子市杉村楚人冠記念館企画展

# 嘉納治五郎と手賀沼

～幻の東京オリンピックをめぐる～

展 示 目 録

# はじめに

戦争のために幻に終わった1940年東京オリンピック、その招致に尽力した人物は我孫子の先人の一人<sup>かのうじごろう</sup>嘉納治五郎でした。嘉納治五郎は我孫子の人びとと親しい関係を築いていたため、一時は我孫子でも、手賀沼をオリンピック会場に、と盛り上がりを見せたのです。この展示ではそんな歴史を掘り起こし、皆さんにご覧に入れます。

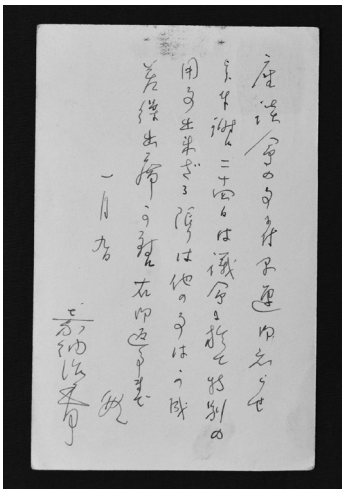
## 1 嘉納治五郎と手賀沼

絵葉書（複写）「我孫子天神山から安美湖の眺望」◇

嘉納治五郎葉書 [24日は座談会に出席に付返答]

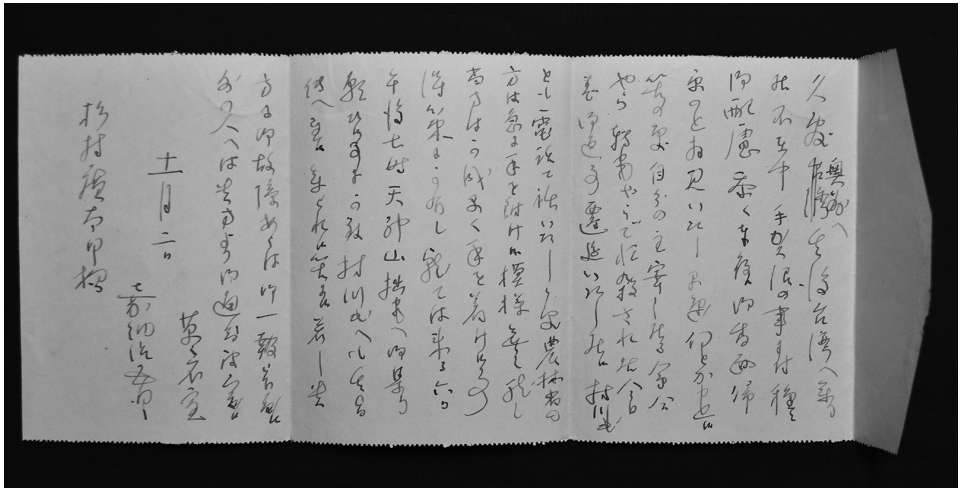
杉村楚人冠著『楚人冠全集』第五巻より「村の会」

嘉納治五郎封緘葉書 [手賀沼の件相談会通知状]



嘉納治五郎は明治末期に我孫子に別荘を構えます。日本橋の薬種問屋<sup>しまだ</sup>島田久<sup>きゅうべえ</sup>兵衛に次ぎ我孫子では二番目の別荘でした。自分の別荘がある通称天神山から手賀沼を見下ろす写真を入れた絵葉書を作り、その説明文に手賀沼のことを「<sup>あびこ</sup>安美湖」と洒落るなど、手賀沼の眺望は特に嘉納<sup>ひ</sup>を惹きつけた要因でした。

座談会出席を告げる葉書



手賀沼干拓反対の相談会を楚人冠に呼びかける嘉納の封緘葉書

その嘉納はいわゆる別荘族然とした態度をとるのではなく、我孫子の人びとと親しみ、彼らに尊敬されていました。嘉納のほか杉村楚人冠<sup>すぎむら そ じんかん</sup>ら東京からきた有識者が我孫子の主だった人びとと我孫子の将来を語り合いながら懇親した座談会が開かれたことがその象徴と言えるでしょう。そして、手賀沼を愛する嘉納は有力な干拓反対論者でもありました。手賀沼を活かして我孫子の発展を図る道こそ、嘉納が我孫子の人びとに指し示した方向でした。

## 2 嘉納治五郎と幻の東京オリンピック

永田秀次郎宛嘉納治五郎書簡（複写）

[IOC ウィーン総会の様子に付] △

下村宏宛嘉納治五郎書簡（複写）[会議の結果報告に付] △

柔道家として有名な嘉納治五郎ですが、手賀沼干拓反対運動の仲間である<sup>むらかわけんご</sup>村川堅固が学生として在籍していた熊本の第五高等学校で校長を務めたのをはじめ、数多くの学校に関わった教育者でもあり、外国人の前で柔道の組み手を実演しながら英語で説明して見せたというほど英語に堪能でもありました。このような資質の持ち主だからこそ、アジア人で初のIOC（国際オリンピック委員会）委員にもなりえたのです。

そしてIOCは1936（昭和11）年に4年後の東京開催を決定します。しかし、日中戦争の勃発、拡大は東京開催に疑問を強める結果となります。1938年、IOCカイロ総会で嘉納は東京開催の確約を請け合うも、その帰途バンクーバーから乗船した氷川丸の船上で逝去。約二か月後には大日本帝国政府が戦争のため開催返上を決定しました。

### 3 手賀沼と幻の東京オリンピック

『千葉読売』（複写）[“誘致の手” 乱れ飛ぶ] △

『千葉読売』（複写）[総工費は卅万円] △

井上武宛染谷正治書簡 [郷会長と面会賜りたい] ○

井上武宛砂原宣雄書簡

[漕艇協会は戸田の腹案も手賀沼は費用面で可能性あり] ○

井上武宛平賀平作書簡 [嘉納より電話あり明日上京願いたい] ○

井上武宛染谷正治書簡 [手賀沼誘致断念も援助に感謝] ○

「手賀沼漕艇場計画図」 ■

（日曜日） 日二月八年一十和曆

**望希る躍に報快**

**誘致の手が亂れ飛ぶ**  
水上競技場の一部を手賀沼へ  
稲毛海岸へはオリムピック村

さて、どう出る骰子

**千葉読賣**

**品河川で発見**

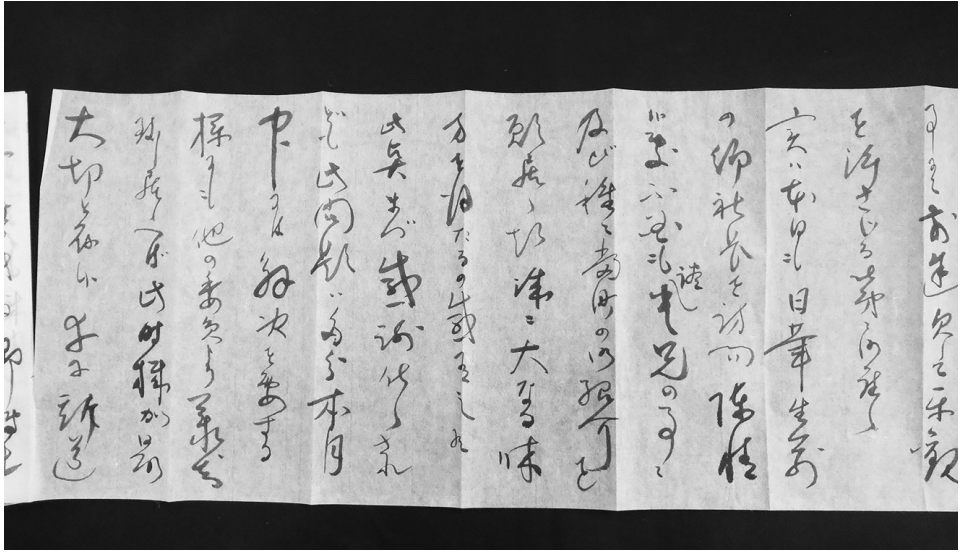
**石原知事語る**

幻に終わったとはいえ、普段から頼りとする嘉納治五郎が貢献した東京オリンピック招致に我孫子の人びとも一時は沸き立ちました。望みは、手賀沼でのそつてい漕艇競技開催です。東京招致が決まるや、新聞には、千葉県と協力して誘致運動を起こすなら、応援する旨を町長に語っていたことが報じられます。その言葉どおり、千葉県の技師がコースや観戦スタンドを

東京大会の開催決定と誘致活動の始まりを報じる『千葉読賣』紙面

設計して、正式な立候補にこぎつけます。立候補時の報道によれば、費用が他候補の半額で済むとされ、これが手賀沼会場のアピールポイントだったようです。

運動の中心は我孫子町長そめやしやうじ染谷正治だっと思われませんが、布佐町からも協力者が現れました。東京帝国大学漕艇部出身



井上武に協力を呼びかける染谷正治町長の書簡

で、相島新田の開拓地主井上家の跡取り、井上武いのうえたけしです。競技場調査委員の郷隆ごうたかしとの面談から井上と漕艇協会の人脈を知った染谷は、協力を呼びかける手紙を送りました。

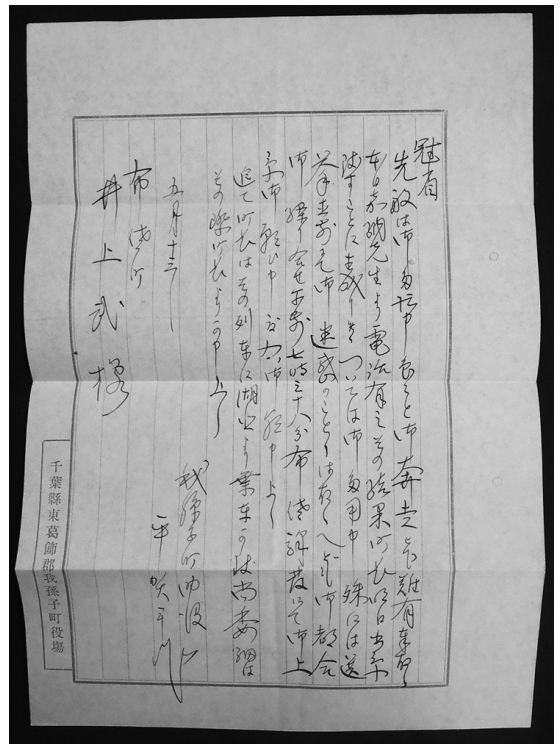
井上のところには帝大漕艇部の後輩である砂原宜雄から、漕艇会場の検討状況について情報がもたらされていたことが、旧井上家住宅に残っていた資料からわかりました。これによると、漕艇協会は完全に人工のコースを新設し競技環境としては理想的な戸田会場（現埼玉県戸田市）を希望することが決まっているが、いくら予算がとれるのか、組織委員会に認めてもらえるのかが不明とされています。つまり、手賀沼の場合は天然の水面を活かしコスト安をセールスポイントとして誘致活動を展開していくことが生命線であったわけで、立候補時の新聞報道の

内容を裏付けます。

最終的には戸田が会場に選ばれ、手賀沼沿岸の人びとの希望はかないませんでした。

実は決定の5日前、我孫子町役場に嘉納治五郎から電話が入り、染谷正治町長と井上武が上京を要請されていました。最初の新聞報道では嘉納個人として応援したいという談話が、又聞きで書かれていましたが、要職にあるものとして表立って活動することはできないながらも、嘉納治五郎も協力してくれていたのです。

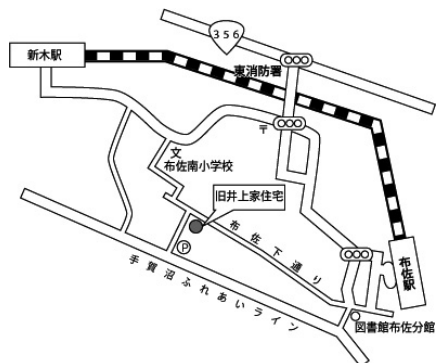
嘉納の協力を示す資料は、この電話の件を井上武に伝える我孫子町助役平賀平作の書簡が、現在のところ唯一の存在です。五輪競技会場招致の夢は夢のまま終わりましたが、嘉納治五郎と手賀沼沿岸の人びとがともに沼を活かそうと動いたことは、我孫子の歴史から欠かすことのできない一幕となっています。



染谷正治町長、井上武が  
嘉納治五郎から上京を要請された  
ことを伝える平賀平作助役の書簡

# 旧井上家住宅のご案内

本展示でご紹介した井上武は、当時相島新田井上家の跡取りでした。井上家は江戸時代にこの地域を干拓して水田を開き、開拓地主となった旧家です。旧井上家住宅はその母屋や土蔵、油をこすスペースであった旧濾場<sup>こしほ</sup>などが残り、かつての豪農層の経営ぶりをうかがわせます。こうした特徴から市指定文化財となり一部公開されています。ぜひお立ち寄りください。



我孫子市相島新田 1 番地 JR 成田線布佐駅徒歩 20 分

手賀沼ふれあいライン沿いに駐車場有 入場無料

9 時～16 時（入場 15 時 30 分まで）月曜日休業（月曜日が休日の場合翌平日）

企画展 嘉納治五郎と手賀沼～幻の東京オリンピックをめぐる

展示目録

令和元年 7 月 9 日（火）～10 月 6 日（日）

我孫子市杉村楚人冠記念館

〒270-1153 千葉県我孫子市緑 2-5-5 電話 04-7182-8578